

## 「レギオンと豚」

2014年08月17日

マルコによる福音書5章1節～20節。

主イエスはゲラサ人の地方に着き、舟から上がられると、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。彼は墓場を住まいとし、足枷や鎖で縛っても引きちぎり砕いてしまう。昼も夜も叫び、石で自分の体を打ちたたき、血だらけである。主イエスを見ると、走り寄ってひれ伏し「いと高き神の子イエスよ、かまわないでくれ、後生だから、苦しめないでくれ」と懇願する。主イエスが「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。主イエスが「名は何と言うのか」と問うと、彼は「名はレギオン、大勢だから」と答える。汚れた霊どもは追い出さないでくれと言い、この地で飼われていた「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願う。お赦しになると、霊どもは豚の中に入った。すると、2千匹ほどの豚の大群が暴走し崖を下って湖になだれ込み、次々とおぼれ死んだ。豚飼いたちは逃げ出し、町や村に知らせた。何が起こったのかと来てみると、レギオンの霊に取りつかれた人は服を着、正気になって座っているのを見て恐れた。

おどろおどろしい奇跡である。汚れた霊が人に取りつき狂気にするという考えが基本にある。聖書は言葉数が少なく、理解し難い。それは逆に、想像力を高める。この奇跡はレギオンの霊が「鍵」であろう。レギオンは6～8千人からなるローマの重武装軍団である。レギオンが突っ走る所は死体が累々と重なる戦場となる。レギオンの霊に取りつかれた人は全身全霊が「重武装軍団」になった。自分自身を傷つけ、鎖では繋ぎ止められず、他者に恐怖と害を与える。レギオンの霊が乗り移った豚の大群は歯止めがきかず、湖の中へと溺死していく、自らの死へと暴走する。

富国強兵に走った日本軍は暴走し、アジアを戦場と化し、屍を重ねていった。その最後は無謀な「玉砕」、「神風特攻隊」、片道の燃料しか積まない「戦艦大和」など、死へと暴走するしか術をもたない軍隊になっていった。レギオンの霊を彷彿とさせる。

マルコ福音書の著者は、自分自身と他者を傷つけ、死へと暴走するレギオンの霊から解放された人が「正気になる」と書いている。

この奇跡には続きがある。ゲラサは異教の地で、イスラエル人が汚れた動物とした豚を飼っていた。豚は経済効率のよい家畜である。肉はもちろん食料となり、足も「豚足」として食べられ、毛はブラシになり、捨てる場所がない。ゲラサの住民は、墓場をすみかとし、鎖を引きちぎり、叫び続ける人に「困ったものだ」と困惑していた。その彼が正気に戻ったことは喜ぶべきことである。しかし、その代償に2千匹の豚が失われたことは耐えられない。彼らは一人の人間の救いより、豚がもたらす経済を優先させ、主イエスに出て行ってもらいたいと要求した。

レギオンの霊に取りつかれた人は、自分自身と人々を死へと追い込む「軍隊」と、人より経済を優先する「資本」の狭間で「正気になる」主イエスの奇跡に与っている。「軍隊」と「資本」が人間を貶めている今の世界の状況に呼びかける極めて現代的なメッセージが込められているのではないかと、想像は膨らむ。マルコ福音書記者の奇想天外の記述は、主イエスの福音は人を殺す軍隊より、また、豊かさをもたらす経済至上主義より、一人の人間を救う愛に向かっていると語っているのではないか。